ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学　所属：国際看護学部　名前：高谷 知史　作成日：2026 年 1 月 30 日

１．教育の責任

＊看護の基本となる知識・技術・態度のみならず，近年の日本におけるグローバル化に対応できる看護師を養成するため，国際看護学部の教育理念である多様性への理解と受容及び看護ができる看護教育の一翼を担っている．

２．教育の理念

＊革新的な方法による授業（講義・演習・実習）をプロデュースし，様々な場（療養場面，地域，国）で生活するこどもとその家族の将来性，多様性と普遍性を理解し，自らの実践を科学的根拠に基づいて実践できる看護学生を育てる．

＊こどもと家族の両者の立場からこどもとその家族の健康を第一に考える Children＆Family First のロールモデルとなる．

＊学生と教員が対等な立場で議論する．相手がだれであっても自分の考えを自信を持って発言する大切さを学生と共有する．

＊ゴールを明示し，学生が失敗を恐れず挑戦する機会をつくる．

＊自分が影響を与える存在であることを自覚し，プロフェッショナルとして責任を持って行動できるようにサポートする．

＊小児看護教育を内省し，かつ革新的な教育方法を導入することで，学生にとって効果的な授業を展開する．

３．教育の方法

＊教育の目的と目標

１）<u>実践や技術の根拠を既習の知識とループさせることができる</u>

講義では，看護学はあくまで実践学であり，自身の臨地経験と形式的な知識を結びつける，すなわち，経験と知識で双方に裏付けを行う講義を展開する．演習では，講義で得た知識を活用して，こどもへの看護を考え実践する形式としている．そして，実習では，講義，演習を学修したことの集大成として，実際のこどもへの看護過程や小児看護技術の実践のリアルを体験し，その内容と方法について，成人看護と比較しながら学修する．

このように，講義・演習・実習のシームレスな学びの積み上げを意識した教育を目指している．例えば，「小児看護援助論Ⅱ」では，様々な健康問題や障がいをもつこどもと家族が，自らの力で健康状態，QOL や Well-Being を維持・向上していくために必要な小児看護実践の知識とそのプロセスを習得する．また，そのようなこどもに対するヘルスアセスメントや日常生活援助技術，症状緩和技術を実践できる能力を習得する．

２）<u>こどもや家族の生活する“環境”について考えることができる</u>

こどもや家族は，周囲の環境（ひと・もの・こと）からの影響を受けやすく，双方の相互作用の中で，健康を維持している．そのため，地域での“生活環境”や入院中のこどもの“療養環境”にフォーカスし“こどもの成長発達や療養等にとって適切な環境とは何か？”を考えられるように学修する．例えば，「小児看護援助論Ⅱ」では，主に療養環境（病院）におけるこどもの生活環境の特徴について理解し，安全かつ安楽な環境を整えるための看護実践について習得することを目的としている．また，看護研究では，学生の関心のある看護現象を探求し，論理的にその現象を記述し説明できる研究方法の習得を目的としている．

３）<u>対象者の体験する世界を理解することができる</u>

自分とは異なる多様性をもつ他者の体験や価値観等を理解することが看護の対象理解において重要である．そのため，1人称視点でそのような仮想現実を体験することで，対象者の思いや体験をよりリアルに想像し，看護に活かせる看護師を養成する．

４）<u>学生個々が看護への自信と責任とプロフェッショナル感をもつ</u>

個々の学生が自身の専門性と何か，その専門性はチームの中でどのように活かせるか，また，その専門性はどのように身に付けられるのか等，といった“専門性”を考え，知識・技術・態度を修得した実感も重要である．例えば，看護研究では，学

大学名：大手前大学　所属：国際看護学部　名前：高谷 知史　作成日：2026 年 1 月 30 日

生の関心のある看護現象を探求し，論理的にその現象を記述し説明し，看護研究の実施後には，他学生と比べて，特定の看護分野において少しでも秀でていることを実感して卒業できることを期待する．また，大学院国際看護研究科では，看護医療におけるデジタル技術の可能性の探求や地域保健におけるグローバルヘルスの考察にかかる科目を担当する．

＊教育実践

① 実践ベース＆国試ベースの知識教授

講義では，逆算的に，臨地における看護や実習において，実践に直接的に必要になるであろう事象について，ならびに国家試験で問われる可能性の高い事象について，最低限のことを優先的に教授する．小児看護学に関連する国試問題に実習グループの小単位で取り組み，教員による解説まで行う．

② 主体的な学びを促進する工夫

演習では，「小児看護学概論」「小児看護援助論Ⅰ」および「小児看護援助論Ⅱ（実習前）」で習得する知識を活用して，事例を用いた協同学習（ジグソー学習法など）によって，こどもと家族のアセスメントを行い，健康問題や障がいをもつこどもと家族への支援計画ならびに看護実践を考察する．学生は授業毎にワークブックを作成し予復習を行う．また，ロールプレイを通して，「小児看護援助論Ⅰ」で習得したヘルスアセスメント技術を応用した知識・技術，小児看護場面における医療英語を活用した問診を理解する．さらに，実習施設におけるフィールドワーク（病院における環境観察等）を通して，「小児看護学概論」「小児看護援助論Ⅰ」で学んだ知識・技術の形式知と臨地での実践知を融合するため，発達段階に応じたこどもの特徴と安全かつ安心できる環境，成長発達を促す環境について考察し，こどもや家族の療養環境のユニバーサルデザインについて考察する．また，看護研究では，与えられた課題だけに取り組むのではなく，自身で調べてまとめ理解し他者に説明し質疑応答する機会を意図的に設定する．「感覚多様性探求」では，AR・VR の ICT を駆使して，よりリアルな対象理解を深める．「デジタルヘルスケア特講」では，デジタルヘルスケアの最先端を教授し，学生が考える社会課題についてデジタル技術によるソリューションを討議する．また，「グローバルコミュニティ実習」では，日本に生活する定住外国人のヘルスケアニーズと看護医療職の役割・機能について考察する機会とする．

③ 学生が安心できる環境づくりのための工夫（心理的安全性の確保）

1．課題の伝達を文章および視覚的，かつ繰り返し伝える．

2．講義時間を構造化する（いつも同じ流れで進行する）．

3．個人ワークに加えて，ペアワークやグループワークを取り入れて相互の教授内容の質を保障する．

④ 総合的な学習成果達成のための工夫

1．プレゼンテーションやレポートにはルーブリック評価を提示し，到達点を明示する．

2．講義毎回の学生が el-Campus に記載したコメントには，１週間以内にコメントを返す．

3．レポート，プレゼンテーションなどの課題は，講義ごとに，提出日，課題の内容，コツ等を伝える．

⑤ 各単元で何を学んでいるのかを明確にする工夫

1．講義最後 10 分間は当該講義の振り返りの時間とし，自分の学びを省察する時間をとる．

４．教育の成果

（１）授業見学・授業アンケート等の内部評価

1．学生の毎回の講義の振りかえりコメント

・　実際の看護経験を講義で聞くと，対象のこどもや家族の辛い体験がよく理解できた．

・　一人で看護過程の課題に取り組むと不安なことでも，グループメンバーで共同学習して協働することで自分の考えが間違っていないこと，異なっていても方向性を修正できてよかった．
・　グループの中で，自分の役割を実行しないと目標が達成できないし，メンバーに迷惑をかけるので主体的に行動できた．
・　講義や演習だけでは，理解が難しいその人固有の感覚の多様性を，ＶＲ等で１人称視点で体験することで対象理解が深まった．

講義・演習の内容を，グループメンバーで共有しながら協働することの利点について考え主体的に行動できていた．

２．小児看護学実習および統合看護学実習での学生の発言（アウトプット）

・　小児看護では，こどもの成長・発達をアセスメントすることが個別性のあるケアにつながる．
・　こどもの背景としての家族だけでなく，家族が苦悩を抱える存在として看護していく家族看護の視点を学べた．
・　こどもは全て手伝わなければならない存在という考えから，こども自身でできることを考えて支援することを学べた．
・　乳幼児のような言語的コミュニケーションが難しい対象者とのコミュニケーションについて学ぶことができた．子どもの権利をアドボケイトする役割が小児看護の重要な役割であることに気づいた．
・　小児の在宅医療において，その子の特徴を捉えた専門的なアドバイスを受けながら育児ができ，地域においても，多職種が関わり，地域で障がいをもつ子どもと家族が安心して子育てができると考えた．
・　小児病棟における看護管理の視点から，子どもの安全や感染管理，ケアの優先度において，個々の患児の発達段階に応じた運動機能や認知機能等の発達を考慮した環境整備することが大原則になることを学んだ．

これまでの小児看護学科目で学習してきた，「成長発達するこども」「自律性の尊重」「セルフケアの促進」「家族看護」「子どもの権利」など小児看護で重要な視点を臨地経験を通して，学びとっている．

３．大学院生による授業フィードバック

・　デジタルヘルスについて学ぶことが，これからのヘルスケアにかかる社会課題を解決するために重要かつ必要な知識であり，そのような視点で考えることが重要であることを実感した．
・　地域で生活する定住外国人のヘルスケアニーズに対応することや社会資源となるサービス提出の主体となる施設で実習できることは稀な機会であり，そのような機会があるからこそ，グローバルヘルスを臨地に根差してローカルに考察できる重要な学びができた．

（２）小児看護学領域　教員からのフィードバック

・　週１回行っている領域ミーティングで毎講義の振り返りをしている（Ｒドライブ内の議事録）．

５．改善への努力と今後の目標

【短期目標】

講義ごとの毎回の見直しを行い，各単元の修正および，科目全体の構成，科目内の非常勤講師との連携，さらには科目間の単元連動を意図的に検討する．学生の動機づけをさらに強める工夫として，課題と到達目標や講義内容との関連を明確に説明する．教員同士で常にフィードバック行う．

【長期目標】

現在実施中の小児看護学実習での学生の実践を通して，２－３年次秋学期に履修する科目の教育効果の評価を行う．具体的には，学生の記憶に残りやすかった知識とそうでなかった知識について抽出する．また，なぜ記憶に残りやすかったかについても聞き取り，理解を深めておいてほしかったが，記憶に残りにくかった内容について教授方法の修正を行う．

小児看護学領域の科目を通して，「こども看護のやりがい，特異性」「家族看護の重要性と必要性」「目標達成のために仲間と協働すること」「学ぶ楽しさ，充実感」を感じ学んでもらうことで，卒業後も，組織やチームの一員としての看護職ができることを考え，自分で学習していくことが楽しいと思えることを目指しているため，５－１０年後に卒業生が，学習をそのような姿勢で継続できているか

大学名：大手前大学　所属：国際看護学部　名前：高谷 知史　作成日：2026 年 1 月 30 日

をかかわりながら，検証していく．また，「感覚多様性探求」科目においては，“対象理解”という看護における普遍的なテーマについて，その教材の質評価に加え，ＡＲ・ＶＲといったＩＣＴを使用した教授法とそうでない場合（講義，視聴覚教材の使用，ロールプレイの実践等）とで学生の理解度や看護への活かし方等の学修成果を比較し，その看護教育における有用性について検証する必要がある．

【添付資料（エビデンスとなるものを記載　＊添付はありません）】

・シラバス（「小児看護援助論Ⅰ」「小児看護援助論Ⅱ」「感覚多様性探求」「統合看護学実習」「看護研究Ⅱ」「デジタルヘルスケア特講」「グローバルコミュニティ実習」）
・講義資料　PPT スライド，コースガイダンス，ルーブリック評価
・講義で作成した学生の予習ノート，ワークブック，個人およびグループワークシートなど
・el-Campus に学生が入力した講義中のコメントおよび振り返り
・R ドライブ議事録（小児看護学領域　教員からのフィードバック）

小児看護学分野　*Otemae Castle*

《English Cafe》
《Medical English Cafe》

【国際看護学分野】【基礎看護学分野】
【成人看護学分野】【母性看護学分野】
【精神看護学分野】【在宅看護学分野】
【老年看護学分野】

Credo

《 MISSION 》

小児看護学分野では革新的な方法による授業（講義・演習・実習）をプロデュースし、様々な場（療養場面、地域、国）で生活するこどもとその家族の将来性、多様性と普遍性を理解し、自らの実践を科学的根拠に基づいて実践できる看護学生を育てる

《 English 》

2年秋学期
講義中に英語でアウトプットする機会を持つ（アイスブレイクなど）

3年春学期
多言語問診票を用いて小児看護に必要とされる語彙力と表現方法を高める（講義冒頭のアイスブレイクに取入れ繰り返し触れる、症例に合わせて必要な症状を増やしていく）

3年秋学期
小児看護学概論や小児看護援助論Ⅰで学んだ医療英語をふまえて、小児医療現場（医療機関、在宅医療など）で実際に用いられる医療英語を使用する

4年
統合看護学実習で受け持った事例検討についてプレゼンテーションを英語で行う

- ◆ こども目線からこどもの健康を第一に考えるChildren Firstのロールモデルとなる
- ◆ 学生と教員が対等な立場で議論する。相手がだれであっても自分の考えを自信を持って発言する大切さを学生と共有する
- ◆ ゴールを明示し、学生が失敗を恐れず挑戦する機会をつくる
- ◆ 自分が影響を与える存在であることを自覚し、プロフェッショナルとして責任を持って行動できるようにサポートする
- ◆ 小児看護学の革命児になる
  自らの小児看護教育を内省し、革新的な教育方法を導入することで、
  学生にとって効果的な授業を展開する

〈看護師国家試験〉合格　〈医療英語検定4級〉取得

《 Education 》

4年　こどもへの看護を創造する

看護研究Ⅱ
統合看護学実習

- ◆臨床の疑問や興味をもとにリサーチクエスチョンを作成する
- ◆自身のリサーチクェスチョンをもとに看護研究の一連のプロセスを遂行することで看護実践と研究の関係を知る
- ◆小児看護学領域におけるこどもとその家族のニーズと看護実践について、先行研究を用いて最新のエビデンスを収集し説明する

3年秋期　こどものもつ力を信じ引き出す

小児看護援助論Ⅱ
小児看護学実習

- ◆こどもとその家族の現在と将来の視点から、こどものセルフケアのニーズを系統的に捉える方法を学び、こどもへのケアを実践する
- ◆こどもの安全の視点から、こどもの特性およびこどもの生活環境（ひと・もの・場所）を把握し、それぞれのこどもに合わせた効果的な方法で安全を確保する

3年春期　こどものもつ力を知る

小児看護援助論Ⅰ

- ◆小児看護領域で一般的な事例を通して最善の看護を計画する
- ◆プレパレーション、ディストラクションを通してこどもの持つ力を引き出す方法を考える

2年秋期　こどもに関心をもち自分のこども観を発見する

小児看護学概論
多様性と子ども

- ◆こどもの権利条約、WHOやユニセフの統計を通して世界のこどもの状況を身近な問題として考える
- ◆地域に暮らすこどもの観察を通して発達段階と発達課題を理解する

関連分野　看護専門職者としての基盤を作る

基礎分野
基礎専門分野
専門分野

《 Education 》

- ◆クリティカルシンキングを通して、多面的にこどもと家族をアセスメントし論理的にケアを創造する
- ◆様々な場で生活するこどもとその家族の問題を包括的に捉え、多職種連携の中で看護師の役割を説明する

- ◆こどもの発達の視点から、こどもとその家族から得た情報と診療データを文献と照らし合わせ根拠に基づいたアセスメントを行う

- ◆ 小児看護に必要とされる看護技術について根拠をふまえて演示することができる（VS、身体計測優先）

- ◆保護者向けのリーフレット作成を通して予防接種、発達課題（身長、体重、頭囲、胸囲）、離乳食についての知識を深く理解する

学士力　国際力　実践力

《 Global 》

2年秋学期
保護者向けのリーフレット作成を通して、こどもと家族の多様性について考える

3年春学期
文化的背景を加味したロールプレイ（英語）を通して、こどもとその家族の不安を軽減する方法を考える

3年秋学期
臨地実習において、文化的、社会的、歴史的な視点からグループディスカッションを行い、多様性のある「こどもと家族」への看護を考え表現する

4年
外国人患者やその家族をはじめとした、病院における普遍的かつ多様なニーズを尊重した環境づくりを考える